
トーマス・マン『魔の山 (*Der Zauberberg*)』(1924)

におけるアジア像と 20 世紀初頭の黄禍論

高辻 正久

1. はじめに

現在、軍事・経済で台頭し強権的な手法によって世界における影響力を強める中国に対して米国は警戒を強めているが、約 100 年前の 20 世紀初頭においては、黄色人種とその国家である中国・日本等の台頭が欧米諸国にとって脅威となるという考えが広がっていた。この考えは「黄禍論 (die „gelbe Gefahr“)」と呼ばれ、ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世 (Wilhelm II, 1859-1941) が 19 世紀末から積極的に喧伝し、欧米諸国に広まった。黄禍論の盛り上がりは日露戦争 (1904 ~ 1905 年) の時期に頂点に達し、第一次世界大戦 (1914 ~ 1918 年) 後に影をひそめたと言われている¹⁾。

20 世紀初頭に書かれたトーマス・マン (Thomas Mann, 1875-1955) の長編小説『魔の山 (*Der Zauberberg*)』(1924) においても、黄禍を想起させるような台詞や情景描写がいくつか見られる。20 世紀前半のドイツの代表的作家トーマス・マンも、黄禍論の影響をいくらか受けていたのだろうか。また、中国・日本等を含むアジアについて、当時のマンはどのようなイメージを持っていたのだろうか。

本稿では、トーマス・マンの長編小説『魔の山』に描かれているアジア像を、黄禍論の観点から分析したい。そして、1915 年から 1918 年の間に書かれた彼のエッセイ『非政治的人間の考察 (*Betrachtungen eines Unpolitischen*)』(1918) および 1918 年から 1921 年の間に書かれた日記 (*Tagebücher 1918-1921*) も参照しながら、欧米諸国に黄禍論が流布していた 20 世紀初頭におけるトーマス・マンのアジアに対するイメージについて考察したい。

2. 欧米諸国に流布した黄禍論

まず、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて欧米諸国に流布していた黄禍論 (die „gelbe Gefahr“) について、簡単に確認しておく。ドイツの歴史学者ハインツ・ゴ

1) Vgl. Gollwitzer (1962: 219).

ルヴィツァー (Heinz Gollwitzer, 1917-1999) によれば、黄禍とは、黄色人種である中国人や日本人が、白色人種である欧米人に与える脅威のことをいう²⁾。20世紀初頭の欧米諸国にとって黄禍の脅威とは、具体的には中国と日本による経済的な脅威および軍事的な脅威だった。経済的な脅威とは、中国と日本からの低賃金労働者が欧米の白人労働者の職を奪い、さらに彼らの低価格商品が欧米諸国の市場を攪乱するのではないかという懸念である。また、軍事的な脅威とは、同じ黄色人種の国家である中国と日本が同盟を結び、欧米の勢力をアジアの植民地から駆逐して、さらに欧米諸国に迫ってくることに對する懸念だった³⁾。

ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世が1895年以来、欧米諸国の君主や政治指導者に黄禍の脅威を喧伝した本当の目的は、このスローガンを利用することによってヨーロッパにおけるドイツの孤立を解消することだった。また、黄禍論によってロシアを東アジアに従事させることで、ヨーロッパにおけるロシアの脅威を少なくすることもその目的だったと言われている⁴⁾。ヴィルヘルム二世のこの政策は、結果として欧米諸国に黄禍論を広めることになった。もっともゴルヴィツァーは、「黄禍」という言葉はヴィルヘルム二世が作った言葉ではなく、1895年にフランスで発生したものと推定している⁵⁾。

欧米諸国にとって黄禍の脅威の中心にあったのは、黄色人種の家の中でも特に膨大な人口と資源を有する中国の近代化に対するものだった。そして、日本が日露戦争(1904～1905年)でロシアに勝利すると、日本の指導のもとでの中国の覚醒を恐れるようになった⁶⁾。黄禍論は、第一次世界大戦(1914～1918年)まで欧米諸国の論壇を賑わせた後は静まるが、決して消えることはなく、今日でも再び出現する可能性があると言っている⁷⁾。

3. トーマス・マン『魔の山』(1924)におけるアジアに関する記述

3.1. 『魔の山』におけるセテムブリーニのアジア像

それでは、こうした黄禍論の考えは、トーマス・マンが1912年に着想し12年

2) Vgl. Gollwitzer (1962: 20).
3) 飯倉 (2004: 9-10) を参照。
4) 飯倉 (2004: 55-58) を参照。
5) Vgl. Gollwitzer (1962: 42-46).
6) 飯倉 (2004: 136) を参照。
7) Vgl. Gollwitzer (1962: 219-220).

後の 1924 年に完成した長編小説『魔の山 (Der Zauberberg)』には、どのような影響を与えているのだろうか。この作品の中のアジアに関する描写について、黄禍論の考えと比較しながら見ていく。

『魔の山』のあらすじをごく簡単に述べると、第一次世界大戦の勃発する 7 年前 (1907 年) の夏、ハンブルク出身の 23 歳の青年ハンス・カストルプ (Hans Castorp) が従兄のヨアヒム・ツィームセン (Joachim Ziemßen) を見舞うために 3 週間の予定でスイスのダヴォスにある国際サナトリウム「ベルクホーフ (Berghof)」へ旅立つが、そこで彼も肺を病んでいることがわかり療養することになる。ハンス・カストルプは、サナトリウムでさまざまな人物と出会い精神的成長を遂げていくが、7 年後の 1914 年夏に第一次世界大戦が勃発すると、志願兵として祖国ドイツのために戦うことを決心してサナトリウムを去り、戦場の中に消えて行くという内容である。『魔の山』の物語の期間 (1907～1914 年) は、欧米諸国において黄禍論が特に盛んだった日露戦争後から第一次世界大戦までの時期とほぼ重なっている。

主人公のハンス・カストルプがサナトリウムで出会う人物の一人に、イタリア人の文学者ロドヴィコ・セテムブリーニ (Lodovico Settembrini) がいる。ハンス・カストルプは、サナトリウムに到着した翌日に、患者として滞在しているセテムブリーニに散歩の途中で出会い、それから 7 年後にサナトリウムを去る日まで、彼から文学や政治などに関する知識や考え方を学ぶ。ハンス・ヴィスリングによれば、セテムブリーニは『魔の山』において、西欧の価値観すなわち理性と活動を支持する立場に立っている⁸⁾。ただし、セテムブリーニの「理性と活動」の精神は、しばしば極端で滑稽に描かれている。たとえば、彼はハンス・カストルプに対し、「時間は神々のたまものであって、利用するようにと人間に貸与されたものです。一利用するようにとです、エンジニア [ハンス・カストルプ]、人類の進歩のために利用するようにと」⁹⁾ (括弧内筆者) という調子で説教をしたりする。

若者の成長過程を描く教養小説 (Bildungsroman) である『魔の山』において、主人公ハンス・カストルプにとって教育者のような役割をする登場人物は、このセテムブリーニ以外にたとえばユダヤ人のイエズス会士レオ・ナフタ (Leo

8) Vgl. Wysling (1990: 403).

9) Mann (2002a: 369). 日本語訳は関・望月 (1988 上: 420) から引用した。

Naphta) などがいる。しかし、登場する期間とハンス・カストルプと接する頻度において、セテムブリーニは主人公の教育者として中心的な存在といえる。

セテムブリーニがハンス・カストルプに対して語った話の中には、アジアに関するものがいくつかある。ハンス・カストルプはサナトリウムの食堂や散歩道などで、セテムブリーニから、たとえば次のような話を聞かされる。

セテムブリーニの配列と表現によると、二つの原理が世界を支配しようとして争っていた。権力と正義、圧制と自由、迷信と知識、保守的原理と沸騰する運動、進歩の原理とであった。一つをアジア的原理と呼ぶと、他はヨーロッパ的原理と呼べた。ヨーロッパは反抗、批評、革命的行動の地であるのに反して、アジアは停滞、無為の安静を具現していた。二つの力のどちらが最後の勝利を得るかは、考えるまでもなく明らかであって、一啓蒙の力、合理的完成の力が最後の勝者である。人間性はかがやかしい発展途上においてつぎつぎと新しい民族を糾合し、ヨーロッパ自身でも地盤をひろげつづけ、アジアにも進出しはじめているからであった¹⁰⁾。

セテムブリーニは、世界をヨーロッパとアジアの二つにはっきり分け、これらは互いに争っていると言う。この点は、黄禍論の考えと類似しているように見える。また、アジアを迷信にとらわれていて保守的で停滞したものと考え、合理的で進歩するヨーロッパの優勢を強調している点は、19世紀後半のヨーロッパ列強による帝国主義を想起させる。飯倉によれば、多くの文献が帝国主義と黄禍論の類縁性を指摘していて、帝国主義を支えた人種主義や文明化の使命論などのイデオロギーは、黄禍論の考えとも密接なつながりを持っていたという¹¹⁾。

セテムブリーニがハンス・カストルプに示すこの「ヨーロッパ対アジア」という構図は、おおよそ『魔の山』全体の世界観的見取り図と見てよいと田村は指摘し、『魔の山』の背景となる第一次世界大戦前の政治情勢が「ヨーロッパ的原理」と「アジア的原理」の闘争として分析されていると述べている¹²⁾。ただし、セテム

10) Mann (2002a: 240). 日本語訳は関・望月 (1988 上: 271) から引用した。

11) 飯倉 (2004: 19-27) を参照。

12) 田村 (2006: 51) を参照。

ブリーニがハンス・カストルプの恋したロシア人女性クラウディア・ショーシャ (Clawdia Chauchat) も危険視しているように、ここでのアジアにはロシアも含まれている。たとえば速水は、『魔の山』の前半部において、マンはセテムブリーニとクラウディア・ショーシャの二人の形象を通じて西と東の対照を表象しようとしたとさえ言っている¹³⁾。また伊藤は、マン自身もしばしばロシアをドイツと異なる「東の国」、「アジア的な国」と見なしていたと指摘している¹⁴⁾。

さらに、ミヒャエル・ノイマンによれば、セテムブリーニのアジアに対するこのようなステレオタイプ的な見方は、トーマス・マンの他の著書にも見られるという¹⁵⁾。たとえば彼のエッセイ『ゲーテとトルストイ (Goethe und Tolstoi)』には、「東洋の受動性や宗教的な静寂主義」¹⁶⁾という表現がある。

セテムブリーニはアジアの脅威について、ハンス・カストルプに次のように話す。

「ああ、あなたは東方との比較を好まれるんですね。ごもっともです、アジアが私たちが呑みこもうとしていますから。どちらを見ても、韃靼人の顔ばかりです」¹⁷⁾

アジアがわれわれ (ヨーロッパ) を呑み込むと主張するセテムブリーニのこの台詞は、まさに黄禍の脅威を語っているように見える。また、黄禍の脅威の一つであるアジア人の数的な優勢に対するヨーロッパ人の恐れも感じさせる。セテムブリーニはハンス・カストルプに対し、サナトリウムに滞在しているアジア人たちから影響を受けないように、たびたび警告している。

「あなたはここに弥漫している空気に影響されずに、あなたのヨーロッパ的な生活様式にふさわしい話し方をなさってください、あなた！ ここにはわけても多くのアジア的なものが弥漫しています、一モスコウ系のモンゴール人がうようよし

13) 速水 (2015: 104) を参照。

14) 伊藤 (2014: 145-147) を参照。

15) Vgl. Neumann (2002: 188).

16) Mann (2002b: 919).

17) Mann (2002a: 366). 日本語訳は関・望月 (1988 上: 416) から引用した。

ているだけのことはあります！あの人たちに」— といってセテムブリーニ氏は顎でうしろをしゃくってみせた— 「あの人たちに、気持を順応させてはなりません、あの人たちの考え方に感染してはなりません。むしろあなたは、かれらの本性にたいしてあなたの本性、もっと高貴な本性を主張なさってください、そして、西欧の子、神聖な西欧の子、— 文明の子に、民族的に生まれついている神聖なもの、たとえば、時間を神聖視なさってください。…… 時間消費のこの気前のよさ、野蛮な大まかさ、これはアジア的です、— これも東方の子らにとってここが居ごちよく感じられる理由の一つなんでしょう。」¹⁸⁾

セテムブリーニはアジア的なものを野蛮と見なし、ハンス・カストルプにアジア的なものを避け、自分の中にあるヨーロッパ的なものを守るように警告している。彼のこの警告は、ヴィルヘルム二世が黄禍論を喧伝するために作成した「黄禍の図」と呼ばれる寓意画の題名「ヨーロッパの諸国民よ、諸君らの最も神聖な財宝を守れ！（„Völker Europas, wahrt eure heiligsten Güter!“）」を想起させる¹⁹⁾。セテムブリーニの目には、国際サナトリウム「ベルクホーフ」はアジアの病気の温床に映り、彼はハンス・カストルプに対しすぐにサナトリウムを出て帰国したほうがよいと何度か忠告する²⁰⁾。

なお、セテムブリーニがアジアを表現するのに「韃靼人の顔（*tatarische Gesichter*）」、「モンゴル（*Mongolei*）」という言葉をししばしば使うのは、ヨーロッパ人にとってアジア人種の侵攻に対する警戒心の源になっている歴史が関係している。「黄禍」という言葉が生まれたのは19世紀末だが、それ以前にたとえば4世紀にヨーロッパに侵入しゲルマン民族の大移動を引き起こしたフン族や、13世紀のモンゴルの大侵攻、オスマン帝国（1299-1922）の脅威などがあった。特に13世紀のモンゴルの大侵攻は、ヨーロッパ人の心にアジア人の勢力伸長に対する畏怖と嫌悪をモンゴルの名と結びつける習性を与えたという²¹⁾。

18) Mann (2002a: 368-369). 日本語訳は関・望月（1988上：419）から引用した。

19) 「黄禍の図」については、高辻（2017：152-154）を参照。

20) Vgl. Mann (2002a: 375-376).

21) 橋川（2000：7-16）を参照。

3.2. 『魔の山』における中国人の描写

次に、『魔の山』に登場するドクトル陳富 (Doktor Ting-Fu) という若い中国人男性について見る。ドクトル陳富が最初に登場するのは、サナトリウムを出て行ったクラウディア・ショーシャが、中年のオランダ人のコーヒー王ピーター・ペーペルコルン (Pieter Peeperkorn) を伴って、再びサナトリウムに戻ってきた翌朝の食堂での場面である。この中国人は、ペーペルコルンと同じ食卓に座っていて、彼の話を聞いていた。

しかし、食卓の反対側の末端の若いシナ人は、ドイツ語がまだほとんどわからなくて、話を理解しなかったが、耳をすまし、目をこらして、「はなはだよろしい (very well)」と喜ばしように、満足そうにさげび、一拍手までした²²⁾。

ドクトル陳富は、ペーペルコルンの話を聞きながら、たとえその内容を理解できなくても、大仰なしぐさでお追従を言ったりする。この場面では、彼は強者におもねるような人物に見える。

一方、サナトリウムの滞在者たちと一緒に、夕食後にトランプゲームのトゥエンティー・ワン (Vingt et un) をした際は、ドクトル陳富は別の一面を見せる。

ほんとうにすばらしい味のブドウ酒にみんなの顔はたちまち赤く、真赤になり、ドクトル陳富の顔だけが依然として黄色く、その黄色い顔に鼠のような目が真黒く糸のように光っていたが、このシナ人はくすくす笑いながらたいへん高額の金を賭けて、あつかましいほど勝ち続けた²³⁾。

ここでのドクトル陳富は、酒を飲んでも酔わない冷静な人物として描かれている。そして彼以外は皆ヨーロッパ人という中で、遠慮なく大金を勝ち取っていくという強欲な一面を見せる。この情景は、黄禍の経済的な脅威の縮図のような印象も受ける。また、彼の容貌については、黄色い顔と細い目が強調された非常にステレオタイプ的な黄色人種のイメージに描かれている。

22) Mann (2002a: 832). 日本語訳は関・望月 (1988 下: 360) から引用した。

23) Mann (2002a: 849). 日本語訳は関・望月 (1988 下: 379) から引用した。

そして、サナトリウムの滞在者たちと交霊術めいた室内遊戯「こっくりさん」をやる集まりにおいては、ドクトル陳富の相手を嘲笑する性格が描かれている。「こっくりさん」によって現れたホルゲル (Holger) という名前の霊が、自分は美しいとび色の巻き毛をしていたと答えたとき、ドクトル陳富は次のように言って彼を怒らせる。

ドクトル陳富は、ミスター・ホルゲルはずいぶん自惚れが強いらしいと、くすくす笑っていった。[ホルゲルの霊が乗り移った] グラスは怒っていきりたった！ 気がちがったようにくるおしくテーブルの上を走りまわり、あらあらしく傾き、ひっくりかえり、シュテール夫人の膝の上のところがおちたので、シュテール夫人はおびえて真青になり、両腕をひろげてグラスを見おろしていた。みんなは口々に詫びをいって、グラスをおそろおそろテーブルの上へ戻した。シナ人の陳富は叱られた²⁴⁾。(括弧内筆者)

ドクトル陳富はこの他の場面においても、いつもただくすくす笑っていて、彼の内面についてまったく語られていない。たとえば、サナトリウムで療養している女性から秋波をおくられる場面でさえ、彼はくすくす笑っているだけである²⁵⁾。ドクトル陳富の性格をあえて言えば、冷静だが欲深く、強い相手には媚びるが、一方で嘲笑する癖もあるというように、とらえどころのない存在に描かれている。そして彼の容貌も、非常にステレオタイプの黄色人種のイメージに描かれている。ドクトル陳富のこれらの特徴を考えると、この若い中国人男性は「他者化」されているように見える。「他者」とは、自分にとって理解することのできない異質な、違和感を与えられる存在である。

4. トーマス・マンの戦争観とアジアに対するイメージ

4.1. 『非政治的人間の考察』(1918) 見るトーマス・マンの戦争観

それでは、トーマス・マン自身は『魔の山』を執筆していた時期に、アジアに対してどのようなイメージを持っていたのだろうか。ここでは、1915年から

24) Mann (2002a: 1005). 日本語訳は関・望月 (1988 下: 556-557) から引用した。

25) Mann (2002a: 863).

1918 年にかけて『魔の山』を中断して執筆されたエッセイ『非政治的人間の考察 (Betrachtungen eines Unpolitischen)』における彼の戦争観とアジアに対するイメージに関する記述を見ていく。

『非政治的人間の考察』は、第一次世界大戦が勃発したことにより起きたドイツ・フランス間の知識人たちの言論戦争に、マンが参戦したことにより生まれた論争の書である。このエッセイには、戦争に対する彼の考え以外にも、ドイツ性や芸術、政治に関する考えがさまざまな観点から論じられている。

『非政治的人間の考察』の中で、まず戦争に対するマンの考えを述べた記述を見ていく。なぜなら黄禍論の考えは、ヨーロッパ諸国と中国・日本との戦争の可能性をイメージしたものなので、マンの戦争観において黄禍論との共通点があるか探るためである。

「正義と真理に抗して (Gegen Recht und Wahrheit)」の章において、戦争と芸術家との関係について、マンは次のような考えを述べている。

たしかに、戦争は、原始的な観念や原始的な感情を助成し、ほとんど強要さえる。しかし、芸術家にとっては、そのことが無条件に戦争に反対する理由になるだろうか。民族を神話的な個体とみなすのは原始的通俗的な考えかたである、というのは正しいし、また、愛国主義そのものにしてからが政治的精神的というよりも、むしろ神話的原始的な性質の感動を意味するともいえよう。しかし、もしも芸術家にとって原始的なものがまったく無縁な要素となり、原始的なものへの「復帰」が全然できなくなってしまったならば、その芸術家は駄目であろう、とわたしは信じる。芸術家というものは、原始的なものから疎遠になっていない程度においてのみ、おそらく芸術家であり、詩人であるだろう。かりにかれが「市民」であるとしても、かれが芸術家であり、詩人であるのは、おそらくかれが民族であり、民族固有の原始的な考えかたや感じかたをすっかり忘れていないかぎりにおいてのみであるだろう²⁶⁾。

この記述からは、マンが芸術家として民族固有の原始的な観念や感情を保持することを非常に大切にしていたことがうかがえる。それゆえ、たとえ戦争が原始

26) Mann (2009: 165-166). 日本語訳は前田・山口 (1969 上: 227-228) から引用した。

的な観念や感情を助成し強要したとしても、そのことが戦争に反対する理由になるのか疑問に思っている。また、『非政治的人間の考察』の序文において、マンは自分が元来、19世紀ドイツの伝統に対して非常に愛着を感じていることを告白している。

わたしは、精神的本質からして、まぎれもなく、わたしの生涯の最初の二十五年がぞくしている世紀、すなわち十九世紀の子である。[中略]つまり、わたしのなかにやどっている伝統と芸術的傾向は、その故郷ともいべきこのドイツの名匠気質の世界へ帰ることを指示し、わたしは、この世界に触れるやいなや、自分自身というものが理念的に確証されて有頂天の喜びをおぼえ、ゆたかな力を得るのである²⁷⁾。

1875年にリューベックで生まれたマンは、人生の最初の四半世紀を19世紀ドイツの中で生き、20世紀になっても自分の芸術活動の原点は19世紀の伝統にあると考えていた。しかし、彼がこのように愛着を持つ人生最初の25年間は、帝国主義の時代とも重なっている。したがって、マンは帝国主義を支えた西洋優位の思想に馴染んでいた可能性も考えられる。

また、「美德について (Von der Tugend)」の章において、戦争と芸術の関係について次のように述べている。

芸術は、保守的な力である。あらゆる保守的な力のなかでも最も強力な保守的な力である。芸術は、それがなくなれば — おそらく — 死滅するであろうたましいのもろもろの可能性を保持するものである。[中略]要するに、芸術が存在するかぎり、戦争は、反動的な英雄精神は、非理性のありとあらゆる狼藉は、この世から消滅することはなく、したがって、その可能性を失うことはないであろう。しかも、芸術の生命は、「人類」の生命とともにつづき、それとともに終わるのだ²⁸⁾。

27) Mann (2009: 24-25). 日本語訳は前田・山口 (1969 上: 28) から引用した。

28) Mann (2009: 432-434). 日本語訳は前田・山口 (1971 下: 43-45) から引用した。

マンは、芸術は最も強い保守的な力を持ち、反動的な英雄精神も芸術によって保持されると考えていた。また、彼にとって戦争がリアルなものではなく、反動的な英雄精神に過ぎないということが分かる。この記述は、芸術家と民族固有の原始的な観念との深い関係を述べた先程のマンの記述とも関連している。また、これらの記述からは、マンがドイツ的なものを非常に大切に、それを守るためには戦争をすることもやむを得ないと当時は考えていたことがうかがえる。

一方、「正義と真理に抗して (Gegen Recht und Wahrheit)」の章において、ヨーロッパの平和のために必要なこととして、次のように述べている。

ヨーロッパの平和は、インターナショナルなものではなく、ナショナリズムを超越したものであるべきだ。デモクラティックな平和ではなく、ドイツ的平和であるべきだ。ヨーロッパの平和は、ナショナリズムを超えた民族の勝利と権力とにもとづいたときにのみ、可能となる。最高の普遍主義的な伝統を、最もゆたかなコスモポリタンな天分を、最も深いヨーロッパ的責任感をもっている民族の勝利と権力とにもとづいたときにのみ、ヨーロッパの平和は可能となる²⁹⁾。

マンがここで否定しているインターナショナルなものとは、各民族が持つナショナルな特性を認めず、単一の原理で均質化してしまうことを意味している³⁰⁾。彼は超国家主義を主張しているが、ヨーロッパ的な責任感を最も持つ民族が勝利しなければならないと述べている。マンの言う「最も深いヨーロッパ的責任感をもっている民族」とは、もちろんドイツ人のことであるが、彼がドイツ的なものと同時にヨーロッパ的なものにもこだわっていたことがうかがえる。実際、「自省 (Einkehr)」の章において、「ロマン系、ラテン・アメリカ系の血が一部まざっているわたしは、若いころからドイツ的詩的な傾向よりも、ヨーロッパ的知性的な志向の方が強かった」³¹⁾と言っている。マンの母親は、ドイツ人とポルトガル系ブラジル人との間に生まれた女性だった。また、「市民性 (Bürgerlichkeit)」の章においては、愛国主義者とヨーロッパ主義者の中間に位置することはドイツ的

29) Mann (2009: 227). 日本語訳は前田・山口 (1969 上: 317) から引用した。

30) 友田 (2004: 91) を参照。

31) Mann (2009: 77). 日本語訳は前田・山口 (1969 上: 98) から引用した。

であると言っている³²⁾。

そして、「人間性について (Einiges über Menschlichkeit)」の章において、第一次世界大戦が終わったあとの彼の理想について述べている。

わたしは、戦争にたいして「関係ない」という態度をとれるほど強くもなければ、傲慢でもなかった。わたしは、震撼され、攪乱され、金切声で挑発されたあげくに、喧噪のまっただなかに身を投じ、おのれのを擁護するために論争にくわらねばならなかった。しかし、誓ってもいいが、わたしのたましいが政治から解放されて、ふたたび生と人間性を観照することができるようになるほうが、わたしにはありがたいのだ。この書物を書くことによってよりも、諸民族 — 美しいイギリス人、洗煉されたフランス人、人間味のあるロシア人、聡明なドイツ人 — が安全に囲われた境界線を接して品位と名誉をたもちつつ仲よく共存し、たがいにみずからの最良の財宝を交換しあうときのほうが、わたしの本質は、よりよく発揮されるであろう³³⁾。

第一次世界大戦が終わってマンも言論戦争から解放され、再び本来の自分の創作活動に戻れたときに彼の期待する国は、ドイツ以外にイギリスやフランス、ロシアであると言っている。ここには、中国や日本等のアジアの国々は出てこない。改めて、マンがヨーロッパに愛着を持っていたことがうかがえる。

また、これらのヨーロッパの国々が「たがいにみずからの最良の財宝 (ihre feinsten Güter) を交換しあう」という表現は、ヴィルヘルム二世の「黄禍の図」の題名「ヨーロッパの諸国民よ、諸君らの最も神聖な財宝 (eure heiligsten Güter) を守れ！」を再び想起させる。ただしマンの場合、諸民族の「境界線」すなわち個性をその前提としていて、黄禍論のようにヨーロッパ諸国の団結を望んではない。

4.2. トーマス・マンのアジアに対するイメージ

次に、トーマス・マンのアジアに対するイメージに関する記述を見ていく。

32) Vgl. Mann (2009: 122).

33) Mann (2009: 532). 日本語訳は前田・山口 (1971 下: 181-182) から引用した。

『非政治的人間の考察』の「政治 (Politik)」の章において、アメリカの政治家ウィリアム・ジェニングス・ブライアン (William Jennings Bryan, 1860-1925) の書いた「インドにおけるイギリスの支配」という題名の記事(「南ドイツ月刊誌」1917年4月号)³⁴⁾について触れている箇所がある。

インドでは、死亡率が最近三十年間に二四パーセントから三四パーセントに上昇した一と読んだことがある。しかも、これはペストと飢餓によるものであるが、イギリス人の支配者の冷血さは、ペストや飢餓のなかに人口過剰の予防手段を見る。[中略]「人間の相対的幸福」とか「かろうじて生きているだけの生活が比較的安定している」とかいった、毎年おおよそ一億ドルがインドからイギリスにころがりこむ商売上の事実に伴随する人道主義的現象については、これだけにとどめておく。所詮、これはアジアに、「蒙昧な大衆」に、黒ん坊にかんすることである。「ヨーロッパ人」たる者は、内にむかつてはデモクラットであっても、外にむかつては貴族主義者である³⁵⁾。

マンはインドを搾取するイギリスについて、皮肉を込めて書いている。彼は当時のヨーロッパとアジアの関係について、ヨーロッパ人がアジア人を「蒙昧な大衆 (dunkel Massen)」と見なして、ヨーロッパの域内においては民主主義者であってもヨーロッパの域外においては貴族主義者であるという印象を持っていた。

しかしその一方で、1919年5月10日付の日記には、マンの友人である社会学者エーリヒ・フォン・カーラー (Erich von Kahler, 1885-1970) とアジア的な危険などについて会話をしたことが書かれている。

カーラーとアジア的な危険、差し迫っている破局、協商国の分別喪失、おぞましい老人クレマンソー(この老人はそのうえモンゴル系の細長い目をしているので、もしかしたら西欧文化の没落を助長する血筋なのかもしれない)について語り合う³⁶⁾。

34) Vgl. Kurzke (2009: 456).

35) Mann (2009: 389). 日本語訳は前田・山口 (1969 中: 217-218) から引用した。

36) Mann (1979: 233). 日本語訳は森川・伊藤・洲崎・前田 (2016: 293) から引用した。

マンは、当時フランスの首相で、パリ講和会議（1919年1～6月）においてドイツへの厳しい制裁を主張していたジョルジュ・クレマンソー（Georges Clemenceau, 1841-1929）について、モンゴル系の細い目をしているという理由で、ヨーロッパ文化を没落させる可能性があるかと判断している。この記述からは、アジア的なものは危険でヨーロッパ文化に悪影響を及ぼすと彼が考えていたことがうかがえる。この他にも、1919年5月2日付の日記には、「完全に破壊し全滅させるというキルギス人の考え」³⁷⁾という表現がある。

なお、マンの日記（1918～1921年）には、日本に関する記述はほとんどなかった。たとえば、1919年6月15日付の日記にパリ講和会議における日本の介入について書かれていることと³⁸⁾、1919年8月21日付の日記に日本に対するアメリカの不信感に対して関心を示していること³⁹⁾等が書かれているぐらいである。また、『魔の山』においても日本に関しては、日露戦争においてロシアが日本に敗れたことについてセテムブリーニとナフタとの間の会話で少し出てきたことと⁴⁰⁾、ハンス・カストルプがサナトリウムのある街の映画館で日本の色町の映像を見たこと⁴¹⁾ぐらいだった。

5. おわりに

以上、黄禍論の流布していた20世紀初頭におけるトーマス・マンのアジアに対するイメージについて、『魔の山』、『非政治的人間の考察』および彼の日記（1918～1921年）をもとに探ってみた。

マンが黄禍論に対して直接言及している記述は、特に見られなかった。彼が黄禍論の考えに関心がなかったのかもしれないが、あまり違和感を覚えなかったために、あえて批判しなかったという可能性も考えられる。なぜなら、少なくとも当時（20世紀初頭）における彼のアジアに対するイメージは、黄禍論の考えに類似している点もあるからだ。たとえばマンは、ヨーロッパ的なものを重視し、アジア的なものが危険でヨーロッパ文化の没落を助長すると述べている。一方、彼

37) Mann (1979: 223).

38) Vgl. Mann (1979: 265).

39) Vgl. Mann (1979: 296).

40) Vgl. Mann (2002a: 574).

41) Vgl. Mann (2002a: 481).

のアジアに関する記述において黄禍論の考えと異なる点は、ロシアをしばしばアジアあるいはアジア的と表現していたことと、日本の脅威についてほとんど触れていなかったことである。また、アジアの脅威に対してヨーロッパ諸国が団結することの必要性についても、マンは述べていない。

『非政治的人間の考察』と彼の日記(1918～1921年)には、アジアに関する記述がヨーロッパの国々に関する記述と比べてとても少ない。当時のマンは、そもそもアジアに対してあまり関心がなかったのかもしれない。このことは、『魔の山』における若い中国人男性の非常にステレオタイプの描かれ方からもうかがえる。ギュンター・デボン⁴²⁾は、マンの作品において、中国は特別な役割を演じていないと言っている⁴²⁾。

欧米諸国に黄禍論が流布していた 20 世紀初頭において、トーマス・マンは黄禍の考えに明示的には賛同しなかったかもしれない。しかし、彼も当時の多くの欧米人たちと同様に、中国人・日本人等の黄色人種をヨーロッパ人とは違う「他者」と見なして、また彼自身のヨーロッパ像およびドイツ像を表現するための手段として、現実とは違うステレオタイプのアジア像を利用していたのではないだろうか。

42) Vgl. Debon (1990: 166).

参考文献

一次文献

Mann, Thomas (2002a): *Der Zauberberg*. Frankfurt am Main: Fischer.

Mann, Thomas (2009): *Betrachtungen eines Unpolitischen*. Frankfurt am Main: Fischer.

Mann, Thomas (1979): *Tagebücher 1918-1921*. Frankfurt am Main: Fischer.

Mann, Thomas (2002b): *Essays II 1914-1926*. Frankfurt am Main: Fischer.

トーマス・マン (1988) 『魔の山 (上) (下)』 (関泰祐・望月市恵訳) 岩波文庫。

トーマス・マン (1969-1971) 『非政治的人間の考察 (上) (中) (下)』 (前田敬作・山口知三訳) 筑摩叢書。

トーマス・マン (2016) 『トーマス・マン日記 1918-1921』 (森川俊夫・伊藤暢章・洲崎恵三・前田良三訳) 紀伊國屋書店。

トーマス・マン (1992) 『ゲーテとトルストイ』 (山崎章甫・高橋重臣訳) 岩波文庫。

二次文献

Debon, Günther (1990): Thomas Mann und China. In: Eckhard Heftrich / Hans Wysling (Hrsg.): *Thomas Mann Jahrbuch*. Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, S. 149-174.

Gollwitzer, Heinz (1962): *Die gelbe Gefahr. Geschichte eines Schlagworts, Studien zum imperialistischen Denken*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

Kurzke, Hermann (2009): *Thomas Mann Betrachtungen eines Unpolitischen Kommentar*. Frankfurt am Main: Fischer.

Neumann, Michael (2002): *Thomas Mann Der Zauberberg Kommentar*. Frankfurt am Main: Fischer.

Wysling, Hans (1990): Der Zauberberg. In: Koopmann, Helmut (Hrsg.): *Thomas-Mann-Handbuch*. Stuttgart: Alfred Kröner Verlag, S. 397-422.

飯倉章 (2004) 『イエロー・ペリルの神話 — 帝国日本と「黄禍」の逆説』 彩流社。

伊藤白 (2014) 『トーマス・マンの女性像 — 自己像と他者イメージのあいだで』 彩流社。

ゴルヴィツァー、ハインツ (2010) 『黄禍論とは何か — その不安の招待』 (瀬野文教訳) 中公文庫。

- 高辻正久 (2017) 「ベルツの黄禍論批判とその特徴」学習院大学ドイツ文学会『学習院大学ドイツ文学会研究論集』第 21 号、151-173 ページ。
- 田村和彦 (2006) 「魔法の山の東へ」日本独文学会『日本独文学会研究叢書』第 41 号、46～57 ページ。
- 友田和秀 (2004) 『トーマス・マンと一九二〇年代 —『魔の山』とその周辺—』人文書院。
- 橋川文三 (2000) 『黄禍物語』岩波現代文庫。
- 速水淑子 (2015) 『トーマス・マンの政治思想』創文社。

(たかつじ・まさひさ 学習院大学科目等履修生)

